

平成 30 年度第 2 回 県と市町村との総合教育懇談会（概要）

日時 平成 30 年 11 月 8 日（木）

13 時から 15 時

場所 松本合同庁舎 2 階 203 会議室

【知事あいさつ】

- ◆ 「学びの県」実現に向けて、皆様方のご協力をよろしく願います。市町村と県とで率直な、綺麗ごとでない、子どもたち本位の議論を行う場として、ご協力を賜るようお願いする。

<報告 1：いじめを見逃さない長野県を目指して>

【長野市長】

- ◆ 増加する若者の自殺は、いじめから発展するものが多いのではないかと。発達段階の子どもにとって、夫婦喧嘩や他人の悪口を言う等、大人の些細な行動が影響し、いじめに発展することもある。こういった部分にも注目しないといけない。

【阿部知事】

- ◆ 第 1 回議論のアウトプットは Q&A を作ることで終わりか。本気でいじめをなくそうという心意気が伝わらない。
- ◆ 前回、学校だけでなく、社会で支えないといけない問題であると意見交換した。校長先生が困ったときに、社会では、こういう機関がこう働いていく、といった幅広い視点を網羅した Q&A を作るとよいのでは。
- ◆ 学校ごとに認知の差があるのはなぜか、教育委員会でよく分析してもらいたい。
- ◆ 学校に行きたくない子どもたちもいる。制度・仕組みとして子どもの気持ちを緩やかにさせてあげられるような工夫が必要。

【長野市教育長】

- ◆ いじめの Q&A を出していただくことで、先生方の意識が高まる。背景を探る議論がまだ足りない。いじめを発端に、どう子どもたちを育てていけばよいか、という議論にもつながるだろう。

【原山教育長】

- ◆ いじめが重大事案に発展しないようにするにはどうするか、協議会にて、さらに分析を深めていきたいと思うが、まずは Q&A 作成をスタート地点にしたところ。今後、制度・仕組みを含めた幅広い議論をしていきたい。

【轟教育次長】

- ◆ 本問題は、さらに内容を深める必要があるので、引き続き議論してまいりたい。

<報告2：スポーツを通じた共生社会実現の取組について>

【マクドナルド山本選手】

- ◆ パラパワーリフティングの競技をしており、2020年パラリンピックを目指してトレーニングに取り組んでいるところ。パラスポーツを通じた障がい者理解について紹介する。
- ◆ まず、あすチャレスクールについて。こちらは、アスリートから話を聞き、パラスポーツを体験することで興味を持ってもらい、夢や目標を持つ大切さ、すばらしさを伝える体験授業・出前授業。2016年にスタートし、本年度は300校、日本全国をキャラバンにて駆け巡っている。
- ◆ 次に、あすチャレジュニアアカデミーについて。こちらも出前授業であり、障がい者当事者講師から共生社会の考え方を学ぶ出前授業。あすチャレスクールとは異なり、障がい者理解・共生社会の大切さに焦点を当てて、困っている障がい者の方がいたら、どう手助けするか、そもそも困っていることは何かといった点を子どもたちに知ってもらうもの。気づきを通して障がいの理解を促進するプログラム。今年度からスタートしている。
- ◆ 出前授業と異なり、日ごろから共生社会のこと、他の人を認めてどう生きていくかということについて、学校の先生から子どもたちが学ぶプログラム（テキストブック）が「I'mpossible」である。全国の教育委員会、小中高校に配布済。障がい者は、社会の中で、Impossible=不可能なことが多いと思われがちである。しかし、そこに何か工夫を加えることで、スポーツをしたり、パラリンピック選手のように高みを目指したりすることができる。少し工夫を加えることで、I'm possible=私はできる、という意味になる。この精神を全国の子どもたちに先生から伝えてほしい。
- ◆ パラリンピックはツールであるとしか、思っていない。共生社会を実現させるツールとして、ホットな話題である2020年の東京パラリンピックをぜひ活用してほしいパラリンピックを見たことのない子どもたちにも、感動と興奮を先生の手から伝えてほしいと思う。
- ◆ 自分は障がいを持って生まれている。小さい頃に「人と違っていてもそれが自分の個性である」という理解が浸透していれば、と思うことがある。今の子どもたちには、「人と違っていても、お互いを認めて共生し合う素晴らしさ」を、伝えていってほしい。

【長野市教育長】

- ◆ 長野市では、長野パラリンピック金メダリストのマセソン美季さんに来ていただいて、教員研修を行った。人権教育の一環として、全校で取り組んでいきたいと考えている。

実際、ボッチャ等一緒にやってみると、子どもたちの笑顔が輝いているのがわかる。

【青木村教育長】

- ◆ 信州大学教育学部出身で、冬季パラリンピックにスラローム選手として出場し、今、教師として働いている方に、青木村の通学合宿でサポートしていただいたことがあった。片腕と片足に障がいを持っているが、逞しく生きており、青木村の学校で子どもたちに話をしてもらっている。障がいを克服して、選手として、教師として活躍している身近な大人の姿を見ることは、子どもたちに大変よい刺激となっていると感じている。

【原山教育長】

- ◆ 大変良いお話を伺った。また、長野市教育委員会として取組をされていること、そしてその素晴らしさを実感しているということ伺い、今後、機会を利用して、市町村教育委員会連絡協議会等における情報共有につとめてまいりたい。

【阿部知事】

- ◆ “障がい者スポーツの振興”と“教育の振興”の理念のもと、日本パラリンピックサポート財団と県とで連携協定を結んでいるが、2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、県と市町村とが連携して取り組んでいく必要がある。実際に体験することで、障がいのある方々の思いがわかる。積極的に市町村の皆様にも取り組んでいただきたい。

【マクドナルド山本選手】

- ◆ 色々なところでパラリンピック教育に取り組んでいただいていると思うが、イベント型の出前授業・日常の授業等を通じて、色々な選手と交流していただけるとよいと思う。

【須坂市教育長】

- ◆ 須坂市には、市立の特別支援学校がある。マクドナルド山本選手のお話を伺い、活力ある姿に感銘を受けた。併設校である須坂小学校と須坂支援学校の子どもたち同士が徐々に仲良くなってきている今、マクドナルド山本選手のような方からお話を伺えると、さらに効果があると考えている。

<議題：「学び体験」の充実に向けて 信州サマープログラム（SSP）の提案>

【飯田市教育長】

- ◆ 長野県らしい提案として、信州サマープログラム（以下、SSPと表記）に賛成。しかし、授業時数はどこで確保するのか、というコンセンサスがとれていない段階で、夏休みの延長と絡めて議論するのは危険だと思う。
- ◆ 学校の編成権は校長・基礎自治体にあり、その自由度を奪い、夏休みだけ長くするという議論で突っ走ってはいけな思考える。

【塩尻市長】

- ◆ 子どもたち全体にこれを波及させるのは至難の業。全ての子どもが、リーダーになれる

わけではないし、なる必要もないと思う。体験学習は子どもが成長する大きな機会だが、全ての子どもよりもリーダー気質の子を対象にすべき。

【原山教育長】

- ◆ チャレンジをしたい子どもたちに、機会を与えたいという思いがある。チャレンジをしたいのには、経済的理由で出来ない場合には支援が必要ではないか。

【川上村長】

- ◆ 学び方等、地域によって条件は様々。川上村の場合、夏休みは労働（農業従事等）のためにあるように感じる。夏休み期間の農業体験等を通じて、大人になっても村の後継者として農業をする子どもたちが多。こういった体験も学びだと思う。

【長和町長】

- ◆ 依田窪南部中学校では、夏休みの前に、様々な事業所（福祉施設、企業、病院 etc.）にて子どもたちが就労体験をする取組があり、中学1・2年生全員が体験する。夏休みにもう少し時間をとって、こういう体験活動を行うのもいい。実際子どもたちは生き生きと体験しているのだから。

【箕輪町教育長】

- ◆ 体験活動は長野県教育として大事にしてきたことである。また、文科省資料によれば、たとえば夏休み中に地域のお祭りがあり、学級単位で1日参加した場合、ここでの経験も条件を満たせば総合的な学習の授業にしてもよいということ。こういう変化を活用して夏休みを延長することにつながられるかと考える。

【青木村教育長】

- ◆ 「村の子どもたちは村で育てる」という意識のもと取り組んできたが、これを青木村 Ver.ではなくて、長野県 Ver.にしたい、という県教育長の思いを感じた。地域を超えた学びは現実にあるものの、「信州の子どもたちは信州が育てる」という言葉が普及するまでには、少しずつ段階をふまないといけないと思う。

【長野市教育長】

- ◆ 理念としてご提示いただいた今回の提案には賛成。自然豊かなところへ行って、色々な体験をすることはよいことだと思う。取組を進めるにあたり、信州大学の平野先生等の知恵を借りてもよいかもしれない。また、長野市には県外から、農家民泊で子どもたちが訪れている。

【松本市教育長】

- ◆ 「学び体験」ということで、子どもたちの主体性を育むための根として、「体験」は非常に重要なキーワード。普段の授業には、教え主義・集団主義があり、しかも行事と授業はそれぞれが独立している。ここをどう、切り崩していくか。幼児期からの自然体験が小学校にどうつながり、それが中高の探求的な学びに、子どもの育ちとしてどうつながる

かということを考えていくことが大事。

【須坂市教育長】

- ◆ 自然の中で、子どもが何を体験するか、何を学ぶかの中身が大切。主体性を育むためには、自然の中で子どもたち自身が、「僕たちでも生きていけるんだ」と実感できることが大事。幼保小中高と、自然体験を活かした学びの連続性が欲しい。主体性を柱にした教育への転換が必要。

【阿部知事】

- ◆ 義務教育に進んだ際に、今までせっかく育んできた子どもの主体性が違う枠にはめられてしまうことは問題である。「学ぶ」は子どもたちが主語である。幼児期からの学びが、小中高に連続していく「学びの県」として考えていきたい。

【原山教育長】

- ◆ 学校教育における主体性をどう育むか。学校教育だけでいいのか、という問題意識がある。学校外での学びをどう充実させるか、ということも大きなテーマだと考え、SSPを提案した。夏休みに限った話ではないが、チャレンジ・従事できる期間かもしれないのは間違いない。地域を超えたつながりもあるといいのではないかな。

【長野市長】

- ◆ SSPの構想自体は素晴らしいと思う。ただ、夏休みの延長と一緒に議論するのがよくわからない。また、義務教育のやり方が変わっていかない。学校だけに任せるのではなく、社会全体が担うようにしていく必要がある。

【原山教育長】

- ◆ 現行で一番期間が長いものが夏休み。一定の期間があれば、という意味で例にあげた。夏休みを長くして、授業時数を短くというわけでもない。夏休みを長くして、春休みを短くする方が合理的であることも。また、プログラムへの参加には費用が発生する場合がある。具体的な仕組みはまだ検討段階。

【佐久市長】

- ◆ 経済的理由で参加を選択できない、という子を減らすことは大事。
- ◆ (長野高校生徒のプレゼン資料を見て)先生を尊敬する生徒の割合が低い。学校現場で、尊敬できる人に出会えない現状は問題。

【飯田市教育長】

- ◆ SSPの発信について。そもそも、このプログラムの対象は、長野県内の子どもたちなのか、県外に「学びの県」をアピールするものなのか、明確にしていく必要がある。また、こういう交流条件は認証の基準になる、といった仕組みの構築が必要。また、旅行業法の問題もある。地域を越えて協力していかなければならない。SSPは、「県外と県内の子どもたちの交流である」という位置づけをすることによってブランディングできると思

う。

【阿部知事】

- ◆ 子どもを育てるのは学校の責任という風潮を変えないといけない。学校の先生が修学旅行も部活も相談も授業もハイレベルなものを要求されたら正直無理だろう。社会全体で子どもを育てる、という意識が大切で、この中で教師は研鑽をつんでもらう。複雑化した世の中では、学校だけに責任を押し付けることは限界がある。
- ◆ 子どもたちの主体性は極めて重要。市町村、市町村教委の人と連携して、義務教育の在り方をどうするか、というところなど一緒に転換を考えていきたい。

【原山教育長】

- ◆ 長野県が「学びの県」になるように、これからも提案をさせていただきたい。様々なご意見を伺いながら進めていきたいと考える。

【阿部知事】

- ◆ 台湾を公務で訪れた際、台湾人学生の訪日も日本人学生の訪台もかなり増えていることを知る。外国人の受け入れも視点に入れてもらえるとよいのでは。

【轟教育次長】

- ◆ いただいたご意見を整理し、今後、社会の仕組みの変革含め、具体的にどのようにしていくべきか。県内・県外それぞれに向けた発信の方法等、多様な視点から議論を深めていきたい。